

## 『家伝預薬集』の研究

鈴木 達彦<sup>1)</sup>, 砥上 京子<sup>2)</sup>, 森田 まゆ<sup>2)</sup><sup>1)</sup>北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部, <sup>2)</sup>東京理科大学薬学部

『家伝預薬集』は我が国で用いられた漢方方剤を、岡本玄治が初めてまとめた処方集であると言われるが、今まで詳細な研究がなされていない。本研究では『家伝預薬集』の性格をその他の曲直瀬流の資料と比較し、収載された処方、および編纂の過程を追って検討した。

『家伝預薬集』には原型版があり、寛文6年(1666年)版と同11年(1671年)版がある。凡例、円類、丹類、丸類、散類、雑方と剂形別に区分し、湯剤を除いた処方を収載する構成を採っている。増補版は天和3年(1683年)と宝永7年(1710年)に出ており、400処方以上が増補されているが、剂形別に収載する構成には変更がない。原型版である『家伝預薬集』が出版されたのも、玄治の没してから20年余り後であることから、その他の玄治関連の書と同じく曲直瀬流の流れを組む門人らがまとめたと推察し得る。

はじめに、玄治の関与が色濃いと思われる原型版について、曲直瀬流の他書と比較した。検討の結果、原型版の処方のうちの約半数が、『玄朔常合置方又万聞書』(大同薬室文庫, 32196-490.99)の前半部の処方と重複することがわかった。『玄朔常合置方又万聞書』の成立年代は明らかではないが、処方の下に「雖知苦」、「一溪」、「玄朔」、「玄治法印」と記載されたものがある。一方、原型版の処方を見ると、全体の約45%が「家伝」または「出処未考」とされているほか、『啓迪集』以前に日本に入っていた医書からの引用が約39%で、玄朔の時代に入ってきた医書が約16%であるのに比べて多くの割合を占める。以上から原型版は、曲直瀬道三の時代から玄治に至るまでの曲直瀬一門に伝わる丸散方等の処方を集めたものと位置づけることができよう。

続いて、増補版で増補された処方について検討すると、原型版で多かった家伝は少なくなり、医書からの引用が増える。医書も『万病回春』、『医学入門』など玄朔以後のものを中心となっている。

また、時代は下るが天明元年(1781年)刊『道三丸散重宝記』(富士川文庫カ・236)という丸散方の処方集がある。収載処方を比べると、原型版の処方とほぼ共通し、一部例外はあるが配列順は基本的に同じである。原型版が漢文体であるのに対し、『道三丸散重宝記』は読み下し文であり、条文は簡素であるが、共通の部分が引用されている。異なる点として、原型版にない処方が36方とまって収載されている部分があるが、これらをさらに検討すると、長沢道寿著、中山三柳増補『新增愚按口訣集』の下巻に相当することがわかった。『新增愚按口訣集』の下巻は長沢道寿の37処方と中山三柳が増補した16処方の丸散方により構成されているが、この53処方のうちの36処方が『道三丸散重宝記』の部分に相当し、処方の配列もそのままである。条文を比較すると、『新增愚按口訣集』の主治文と口訣から引用していることがわかる。『道三丸散重宝記』は、発刊はかなり後になるが、増補版『家伝預薬集』の増補処方を含まないことから、中山三柳が増補を加えた1672年から、増補版が発刊される1683年までの初期の段階で派生した異本と推察される。

また、『家伝預薬集』には安永7年(1778年)に鈴木定寛による『刪補家伝預薬集』(千葉大学古書コレクション)がある。読み下し文体で書かれており、増補版から処方が増補・削除されている。そして、新たに湯剤、膏薬、目薬、薬酒、薫物の区分が設けられ、処方が追加されている。

察証弁治を中心とした道三以来、玄朔、玄治と湯剤を中心に用いた曲直瀬一門にあって、当初の『家伝預薬集』は、臨床に用いる頻度は少ないまでも、家伝や効果のある丸散方を集めておいた処方集と位置づけられるであろう。ここにあって、『刪補家伝預薬集』で湯剤の区分が設けられたことは、時代が隔たることで丸散方を中心とした処方集という意味合いが失われたと言える。